

4400 地球のかおり：「燃える天空」(産経新聞) 心模様

日本を出発したのは、11月。南島、クライストチャーチの到着。

南島、ダニーデンや最南端を取材。

そして、南島の東南端のミルフォートサウンド、ウエストランドなど取材。

北島、最南端、ウエリントンに着いたのは、12月半ば過ぎ。

1ヶ月近く、南島を取材していたことになる。

ニュージーランドの気候は、日本とは逆。北風は暖かく、南風は冷たい。

以前にも、ニュージーランドは、訪ねている。

いつものように、日本人が、あまり行かないところを選んだ。

そして、土地土地の風情を楽しみ、取材するひとり旅。

とはいえ、かなりの冒険である。未開の地も多い。未知への挑戦、ワクワクする。

しかし、南島ミルフォードサウンドでは、三日間、雨が降りつづき、

足元の道は、洪水のようで、画像記録を、するどころか、カメラ一台が故障。

遭難寸前の状況を体験したことがある。

こうした、ひとり旅の取材をしていると、何が起こるかわからない。

ニュージーランドは、アラスカや、カナダと違って、危険な動物はいない、

危険な植物も、ほとんどないという、認識だった。

ただ、道に迷うと、恐ろしい。僻地では、人と巡り会うことは、ほとんどない。

南島を彷徨った後、12月半ば、北島南端・ウエリントンに到着。そして、北上を開始。

北島中央部の東海岸、結構アクセスが、難しいが、作戦を練ってチャレンジ。

ただ、ネイピアや、ヘイスティングの街、ホーク湾へのアクセスは、容易である。

ともかく、人があまり行かない場所を選んで、探訪を試みた。

小さな村があった。無人ではない。どこでも、人は住んでいるもの。

太陽が、^{きんきん}燦々とふりそそぐ地域。ワインの材料のぶどう栽培が、盛んである。

宿泊もし、工場を訪ね、試飲もした。なかなか、いけるのである。

ワインも、輸出や輸入されたものが、良いとは、限らない。

その地で、風情を楽しみ、その地の料理を、味わいながら、時を過ごす。

最高のワインを頼んでも、リーズナブル。ビンテージものも、あるだろう。

私には、地元ワインで充分。なんという贅沢。

厳しい旅をして、宿にありつけた時の喜び。ひとり旅には、開放感がある。

身体を休めて、心静かに、夕食を頂く。

お酒は、あまり強くないので、飲む時は、宿やホテルと隣接しているお店が多い。

というのも、グラスワインや、デカンタでは、野暮。ボトルを注文。

時に、夜空を見ながら、豪華でない食事も、また、格別。

この作品ほどの光景ではないが、素敵に景観を見ながらの野外での食事も、乙なもの。

この海岸の向こうには、南極大陸がある。想像が広がる。

海と戯^{たわむ}れ、貝を見ては、遊ぶ。寄せる波と、引く波と、かけっこする。

子供心に、戻ったような開放感。僻地へのひとり旅は最高。

幼少からの家庭環境で、止むを得ず、ひとり遊びが、多かったので、創意工夫の日々。

ひとり旅という、旅のスタイル。それが、今、役立っている。

そして、突然だった。見上げると、眼前の光景が、広がった。

遊びに、夢中になっていて、空模様も、雲が多いという認識でしかなかった。

燃える大空、手も、足元も、見えるものが、真っ赤に、染められたように、感じた。

なんという、見事な光景。息を飲んで、見守った。

並みの、赤色ではない。こんな瞬間の世界が、この地球上には、あるのだ。

感動は、極限に達した。刻々と、色彩が変わる。

画像記録も、忘れるほどの、光のショー。呼吸を止めて、やっと、一枚残せた。

地球の自然現象。同じものは、二度見られない、との思いがある。

特に、瞬きの光景は、その場限り。一期一会、現象は、はかない。

つかみきれないから、愛^{いと}おしい。私は、現場にいる。なんと有難いこと。

嬉しい。楽しい。幸せ。有難い。厳しさを味わってきた、後だけに、倍加する。

素直に、感じられる、今の心境。言葉は、もはや、いらないだろう。

ワインで、乾杯！ 至福の、ひと時だった。